

---

# 僕は飛べなくなりました

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は飛べなくなりました

### 【Nコード】

N00290

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

僕 阿部直樹の背中には、抜けるような白さが自慢の翼があった。けれどその翼は、とある罪で失ってしまった。翼を失い、深夜の公園にたたずむ直樹の前に、クラスメイトの中村香澄が偶然あらわれる。彼女は直樹が翼を失った罪の、唯一の目撃者だった。

僕の背中には翼があった。

抜けるような白さが自慢の翼だった。

小さいけれどちゃんと空を飛べた。

誰にも見えない僕だけの翼だった。

物心つくころから一緒だった僕の宝物は、

いつまでも背中にあり続けるものだと思っていた。

その翼はもう、ない。

今にも降りだしそうな雨雲のように重い身体を引きずる僕とは対照的に、今日の空は雲もなく、小さな星がいくつも瞬いて月のまわりをきらきらと飾っていた。

僕は毎日の習慣で、近所の公園のジャングルジムの上に、ぼんやりと座っていた。

いつもはこんなに月が高くなる前に家に戻っていたのだけど。最近では眠れない日が続いて、長い長い夜をもてあましているうちに夜明けをむかえるようになってしまっていた。

翼がなくなる前は、こうしてただ座ってなんていなかった。毎晩毎晩、誰にも気づかれない夜の間に、思う存分空を飛んでいた。

誰も持っていない、僕だけの翼で自由に空と飛びまわること。それは誰にも言えない秘密の遊びだった。僕の鼓動にあわせて力強く

はばたく翼は、身体を流れる血潮が熱くなればなるほど、その白さを増して高く高く空をのぼっていった。

その翼が、背中から消えてしまった。

僕は立ち上がり、足場の悪いジャングルジムの上でしゃんと背を伸ばす。胸をそらせばそらすほど風を受けてはばたこうとしていたはずの翼は、今やわずかな付け根がしこりのように残っているだけだった。そのしこりが発するじりじりとした熱さはたえず背中ですべり続け、僕はその痛みでさらに増していく気持ちの重さをずっと背負い続けていた。

両手を広げて、公園の中を吹き渡るかすかな風を全身で探す。指先がひとすじでもその流れを拾うことができれば、あつという間にこの身体は空高く舞い上がっていたはずなのに。白い羽根の先がほんのすこし風に触れただけで、この両の足は地面から離れることができたはずなのに。

感じるこのできない風に、僕はいらだちまぎれに空を掴んだ。公園を囲む木々はさわさわと囁いているのに、どんなに目をこらしてもその梢にいたずらをする風を見ることができない。僕の目に映るのは、ペンキがはがれて錆ばかりが目立つ使い古された遊具ばかりだった。

風を掴むことができないなら、無理やりにもその上に飛び乗ってしまえばいい。僕は詰襟のホックを外し、ひとつ深呼吸をしてからジャングルジムのパイプを蹴った。

身体が宙に踊る。空気の抵抗で、広げた腕がぐんと月にひっぱられる。けれどそのわずかな浮遊感も一瞬のことで、僕は抵抗するすべもなく地面に叩きつけられた。

どん、と、重い音がした。僕が落ちた音だった。風に乗ることはおろか、掴むこともできなかった。指で探すことですらできなくて、手は虚しくこぶしをつくるだけだった。

翼を失った僕はもう、空を飛ぶことができないんだ。それを痛いほどに感じて、情けなさに涙が出そうになる。それをぐつとこらえ

て、僕は起き上がろうと砂のやわらかい地面に手をついた。

「……あんた、阿部？ 阿部直樹？」

ふいに声が出て、僕ははっと顔をあげた。

「なにやってんの？ こんなところで」

誰もいないはずの公園の、ぼつりとともった外灯の下。自転車から降りてこちらに駆け寄ってきたのは、同じ中学の制服を着た、よく見慣れた女子だった。

なんで同級生が、こんな時間にこんなところにいるのだろう。あちらも同じ事を思っているようで、驚き半分戸惑い半分の顔で僕を見下ろしていた。

「中村……？」

中村だ。中村香澄だ。予想だにしていなかった事態に、僕は声をあげてしまいそうになるのをぐっとこらえる。喉に力を入れすぎて、くぐもったうめき声がかすかにもれた。

「阿部、あんたなにやってるの？ 今、そこから落ちなかった？」

落ちた拍子に顔をすりむいたようで、右の頬骨がひりひりと傷む。指で傷口についた砂をぬぐいながら、僕は彼女に気づかれないようにそっと呼吸をととのえた。心臓が早鐘を打ちはじめ。じわりとにじみ出た汗が耳の裏を伝った。

まさかこんなところで、一番会いたくない人に会ってしまうとは。

中村は、僕が翼を失ったときのことを見ていた唯一の目撃者だった。

「その傷、大丈夫なの？」

「うん、平気。たいしたことないよ」

濡らしたハンカチを顔にあてながら、僕はできるだけ、中村の顔を見ないように意識しながら微笑んだ。

思ってもみなかったことが起きて一瞬頭が真っ白になったけれど、僕はすぐに起き上がって、さよならと逃げ帰ろうとした。けれど中村は僕の心中など察することなく、さも当たり前のようにひきとめてきたのだった。

傷口を洗うためにとハンカチを水のみ場まで濡らしに行って、呆然と立ち尽くす僕をベンチではなくなぜかブランコに座らせて。傷口に入り込んだ砂をぬぐっているうちに自販機で買ってきたのかジュースを手渡してきて、僕は彼女のペースにのまれてすっかり逃げだす機会を失ってしまっていた。

「阿部。こんなところで、いったいなにしてたの？」

「……ちよつと、いろいろ」

空を飛ぶ練習をしていた、なんて口が裂けても言えるわけがない。言ったところで信じてもらえないだろうし、寝ぼけているのかと思われるかもしれない。中村だってなぜこんな時間にひとりで出歩いているのだろう。僕だって疑問に思ったけど、あえてそれを口にすることはしなかった。

中村は、僕が中学に入学して最初に仲良くなった女子だった。短く切ったやわらかいくせ毛とよく動くまろい瞳が小動物のような愛らしい印象を与えるのだけど、実際話してみるとかなりくだけた口

調で喋る、ざつくばらんとした飾らない子だった。

ちらりと横目で見やると、彼女はコーラを片手につま先で地面を蹴ってブランコをゆらしていた。端正な横顔をしているなど、見るたびにいつも思う。目があうのを避けたくて、僕は視線をそらしながら言い訳を考えた。

「眠れないんだ」

「そっか。あたしと一緒にだ」

ジャングルジムから飛び降りたことには触れることなく、中村はそれで納得したのかコーラを一気に飲み干した。遠慮のない大きなげっぷをしながら缶を置くと、ブランコの上に立ち上がって勢いよくこぎ始める。

「あたしもさ、眠れないことがあると夜に自転車でうろつくんだよ。親にばれたら危ないからやめろって言われるだろうから、内緒にしてるんだけど」

制服を着ているのは、誰かに呼び止められたときに塾の帰りだと言いつけることができるから。はからずしも僕と同じ理由だった。ただしこの時間ではもう、そんな言い訳は通用しないのだけど。

華奢な膝をくの字に曲げて、中村はブランコをこぐ勢いをどんどん増していく。動きにあわせて甘い香りが漂ってきて、僕は中村がお風呂あがりであることを知った。

「星が綺麗に見える日はさ、寝ちゃうのがもったいないんだよね。今日はほら、おいしそうな満月だしさ」

中村が、こぐのをやめずに空を仰ぐ。鎖の鳴る乾いた音と、すこし乱れた呼吸が聞こえてくる。膝を曲げて、伸ばし、今にも飛び立とうとするその姿に、僕は彼女の背中に翼のまぼろしを見た気がした。

中村に翼があつたら、とてもよく似合うと思う。喋らなければかなりの美少女なのだ、そこに白い翼があつたらとても絵になると思う。大福のようにまんまるな満月を追って翼を広げる中村の姿を思い浮かべると、僕の背中の火傷のような痛みがぶり返してきた。し

こりに溶けた蠟をたらされているような、じんわりと尾を引く熱が肩や腰にまで広がってゆく。

苦悶の息をつく僕に気づくことなく、彼女はあきもせずブランコをこぎ続ける。風になびくプリーツの間からむきだしになった太ももはとても細く、さらにその奥が見えそうになって、僕は一瞬、痛みを忘れた。

「……ねえ、阿部」

あとすこしで、見える。寸前のところで、中村はこぐのをやめた。鎖を両腕に抱いて勢いを殺すと、たわんだ鎖がじゃらじゃらと鳴る。乱れた髪が彼女の顔を隠した。

早くなった呼吸を整えながら、中村は言った。その瞳は僕ではなく、月を見上げていた。

「なんで、万引きなんてしたの？」



僕は、恋をしていた。

そのときの翼はとても軽かった。

ひとめぼれだった。恋をして、僕は毎日が楽しかった。彼女のことを思うと自然と翼がはばたいて、普通に歩こうとしても身体が浮き上がってしまったてだめだった。翼は僕の心そのものだ、そのとき強く思った。

楽しいときや嬉しいとき。僕の翼は動きが活発になり、思うままに高く空を飛ぶことができた。逆に気分の良くない、悲しいときや辛いとき、怒ったときは、翼はしゅんと背中にはりついたまま決して風をまとおうとしなかった。

僕が楽しいときは翼も軽く、よく空を飛ぶ。翼が気持ちよく風を切るときは、僕もとても嬉しい。恋は僕の身体を軽くした。

けれど恋は楽しいことばかりではなくて、翼も軽いばかりではなかった。彼女が他の男子と話をしているのを見たとき、僕の中をもやまとしたものが渦巻いてなかなか消えてくれなかった。その嫉妬心は、彼女と言葉を交わせばすぐに消えるぐらいのものだったけれど。消えない間はとても身体が重かった。翼もぴったりと背中にくっついたままで、飛ぶことはおろか、つま先ひとつ浮くこともできなかった。

万引きとその恋がどう関係あるのか。とてもばからしい理由だけど、そのふたつは密接に関係していた。

僕は失恋をしたのだ。

「……なんか、むしゃくしゃしてさ」

笑えるような話ではないのに。僕の口調は軽くてどこか他人事だった。僕の虚しい嘲笑に、中村はただ「ふうん」と呟いて翳ることのない月を見上げるだけだった。

僕の好きな人には、想い人がいた。ふとした会話の流れで、彼女の口から直接、その話を聞いてしまった。表面上は何事もないように話を続けていたけれど、そのときの会話の後半部をさっぱり覚えていないことから、僕はかなり打撃を受けていたのだろうと思う。いつか告白しようと思っていた。けれどその機会もなく砕け散ってしまった恋心を、どう処理していいのか僕にはわからなかった。そしてその衝撃も覚めやらぬ日の放課後。何気なく立ち寄ったコンビニで、僕は好きな人の姿を見つけた。

隣には、彼女が僕に頬を染めながら話していた想い人の姿があった。ふたりは仲良く、なにやら談笑をしていた。はたから見ればそれは、とてもほほえましい光景だった。

それを見てからの僕のとった行動は、衝動としか言いようがない。歯ブラシ一本。そんなもの、欲しいともなんとも思わなかった。ただたまたま目に付いたものを、発作的に、僕は学ランのポケットにしまっていた。

背中に猛烈な熱さを感じたのはそのときだった。

僕は忘れていた。翼が僕の心そのものだということを。心が翳ったときは翼も翳るということ。汚れたことをして心が汚れると、翼も共に汚れてしまうということ。

翼は綺麗でないと姿を保てないということを。

あわてて翼を見たときはもう、遅かった。一点のくもりもない白

さが自慢だった翼は見る間にどす黒く変色していき、かたちを変えていった。まるで熱した鉄が溶けるかのようになり、羽根の先をほかに赤く染めながら、翼はどろどろと崩れて地面に落ちる前に消えてしまった。

いつもそばにあった、大事な宝物の存在を、僕は痛みを感じるまでの間すっかり忘れてしまっていたのだった。

あまりにもあっさりと翼をなくしてしまったことに呆然としていた僕は、焦点のあわない視線の先に、中村がいることに気づいた。

そしてそのまま、店を飛び出したのだった。

だから僕は、中村に会うのが怖かった。気が動転して逃げ出した僕のことを、彼女は問い詰めてくるに違いないと思っていたから。

「むしゃくしゃしたから万引きしたの？」

「……そう」

責めるでも呆れるでもなく、ただ疑問を投げかけてくる中村を、僕はこわくて見ることができなかった。彼女が誰にも告げ口していないことは、いつもと変わらない穏やかな学校生活が静かに物語っていた。

それでも、僕が万引きしたことは変わらない事実だった。盗んだ歯ブラシはもう捨てた。捨てたところで事実が消えるわけがなかった。

「なんで、むしゃくしゃしたわけ？」

「それは……」

言えない。言えるわけがない。あまりにもばかばかしい理由を口にする事ができなくて、僕は前歯でスチール缶の端を噛んだ。

僕はしてはいけないことをした。だから翼は消えてなくなってしまった。罪が消えないのと同じように、僕の背中には決して、翼は戻ってこないのだろう。

僕は翼を失った。

僕は飛べなくなったのだ。

「……失恋、したんだ」

「ばかだね」

間髪入れない鋭い言葉に、僕はうなだれるしかなかった。直球すぎる中村の言葉はかわすこともできず懐に入り込んできて、悔しさなのか恥ずかしさなのかわからないもので胸がいつぱいになった。

なぜか僕は、中村には洗いざらいすべてを話してみたくなくなった。

きつと厳しいことを言われるであろうことも覚悟していた。けれど、僕の中で消えることのないわだかまりのようなものを唯一打ち明けることができるのは、偶然にも僕のあさましい行為を目撃してしまった、中村以外に誰もいなかった。

「……先生に、言わなかったんだね」

「まあね。幸い、他に誰も見てなかったし。あたしだってわざわざチクったりしないよ。まさか阿部があんなことするとは思わなかったけど」

自分だってまさか、してはいけないとわかりきっていることを、するとは思わなかった。お金を出せば簡単に買えるものののに、なぜあの一時の感情で、盗むなんて事をしてしまったんだろう。

「失恋してむしゃくしゃとか。阿部、ばかじゃん」  
「わかってる」

あのとき僕の中で噴き出したのは、密かに心の中で溜め込んでいた彼女への嫉妬心と、行き場のないやるせなさだったのだと思う。それを自分の中で抑えることができなくて、なにかで発散しようとして、とってしまった行動が万引きだったのだ。

「ばか」

「うん」

「ばーか」

「わかってる」

「辛いのは阿部だけじゃないだろ」

「……うん」

顔をあげると、中村は鎖を抱いていた腕を緩めて、小さな板の上にしゃがみこんでいた。むきだしになったふとももに月の光が降りそそいで、その肌は陶器のように真っ白だった。

膝と膝の間にあごをうずめて、彼女は小さく身体を揺らす。公園の木々と、ブランコの背中を押す風の音と、鎖のきしむかな音

が、僕たちの沈黙を埋めた。

中村だって、そうだ。僕は知っている。彼女の恋が、決して実らないものだということを。

彼女の好きな人は担任の先生だった。

毎日顔をあわせる、自分たちの悩みを親身に聞いてくれる、親のようであり兄のようである彼に、中村は学校以上のつながりを求めることはできなかった。生徒は生徒であり、中村はただの女子生徒のひとりにすぎない。先生は中村に、僕に向けるまなざしと同じもののしか与えなかった。

「阿部は、逃げてるだけ」

中村の言葉が、みぞおち深くに響く。どんなに息を吐いてみても、その重いもやもやは僕の中から出て行こうとしなかった。

「……そうだね」

僕は立ち上がり、ブランコをこぎはじめた。

板の上に座り込んだ中村が、垂らしたつま先で地面に字を書いていく。その細いうなじをそっと見下ろして、僕はさっきまで彼女がそうしていたように、強く強くブランコをこいだ。

風を切る。この感覚は、なにも飛び降りなくても得ることができると、僕はいまさらながら気がついた。

僕はわかっていて。この翼がいつか、なくなってしまうことを。

翼は僕の心そのものだった。自由な翼だった。なににもとらわれることなく、縛られずに、自分の思い通りに空をはばくことができる翼だった。

この世界は、すべて僕の思い通りになんていくわけがない。

我慢しなきゃいけないことがたくさんある。あきらめなきゃいけないことがたくさんある。振り向いてもらいたい人の気持ち、僕の思うままに得られるわけなんてない。

今までは、自分の望むものがそのまま手にはいることが多かったけれど。これからは、そんな簡単に手に入ったりしない。欲しいものがなかなか手に入らなくなってくる。あきらめなきゃいけない。

我慢しなきゃいけないし、楽しいことだけじゃなく悲しいこともっともっと増えるはずだ。

僕は、いつまでも自由ではられないのだ。

こぐ勢いを増せば増すほど、ブランコのきしむ音が大きくなる。大きめに買ったはずの制服に追いつき始めている身体が、幼いころはびくともしなかったブランコの支柱に悲鳴をあげさせていた。

「阿部……？」

無心でブランコをこぐ僕の勢いに驚いたのか、中村が声をかけてくる。けれど僕はそれを無視して、身体を低くかがめ、がむしゃらにこぎ続けた。

いずれ、翼は僕の背中から消えてしまうものだったのだろう。

僕はそれを、とても愚かな行為で失ってしまったけれど。一時の感情に流されさえしなければ、まだ一緒にいることができたかもしれないけれど。

それでも僕の身体が大きくなるにつれ、翼はきつと、僕の背中から離れていったのだろう。いつまでも、綺麗な心でい続けることはとても難しいことだ。

「中村。僕さ……」

僕は自由なままではいられない。

世界は思いどおりになんてならない。

「僕さ……」

けれど僕は、できることなら、もう一度自分の翼で空を飛びたいと思う。

「阿部！？」

ブランコがひととき大きく前に揺れたとき。僕は手を離して、宙に身体を踊らせた。

END

身体が、ふわりと浮いた。

けれどすぐに、地面に引き寄せられた。

せめてもの抵抗に、僕は両腕を空に伸ばした。

指をいっぱい開いて、懸命に求めた。

ついこの間まで、背中にあった僕の心を。

なくなってしまった心を。

遠ざかっていく、僕の自由を。

もう一度、空を飛びたい。

僕の背中で、残された翼が、燃えるように熱を帯びた。

「ちよつと、阿部！」

中村のあわてた声が耳に届いて、僕は自分が地面に落ちたことを知った。

背中を強く叩きつけて、痛みでうまく息を吸うことができない。

背中が焼けるような熱さと痛みがないまぜになって、目から自然と涙がこぼれた。

「あんた、さっきからなにやってるのさ！」



前のめりに顔から落ちると思ったのだけど、どういうわけか仰向けに落ちたらしい。なぜ頭を打たなかったのか、自分でもよくわからなかった。

かけよってくる足音が、やけに身体に響く。彼女の蹴った砂が耳にかかって、見上げるとるんだ視界の中に僕を見下ろす中村が見えた。

「中村のことが好きだ」

僕に伸ばそうとしていた手が、宙で止まった。

一步、彼女は後ずさる。すばらしい眺めだったスカートの中は見えなくなった。白だった。

「阿部はばかだ」

「うん」

「本当にばかだ」

「……うん」

これで、完全に嫌われた。僕は自嘲の笑みを漏らしながら、まぶたを閉じた。

困惑して、瞳を泳がせる中村の姿がまぶたに浮かぶ。彼女だってこんなことを言われるなんて夢にも思っていなかっただろう。僕だって普通なら、好きな人相手に、あんなばかな話をしたりはしなかったはずだ。

好きな子に、万引きという、一番最悪なところを見られた。軽蔑されたと思った。だからもう、なにを話しても同じだろうと思った。ここまでさらけ出してしまったら、もう、最後まで言ってしまうと思った。

「中村が好きだ」

失恋して、悲しかった。振り向いてもらえないことが恨めしかった。

なによりも、この気持ちを伝えることができなかったのが悔しかった。

「……ごめん」

「うん」

結果はわかっていた。中村の気持ちはよくよく知っていた。あのときコンビ二で、偶然先生を見かけて話しかけていた中村が、叶わない恋だとわかっていてもなお、先生を好きでいることがやめられないことも知っていた。

そして僕もまた、彼女を好きでいることがやめられなかった。

「……話、聞いてくれてありがとう」

僕が再びまぶたを開けると、中村の顔がすぐそばにあった。身体をかがめて様子をうかがってくれていた。こんな愚かな僕のことを、どうしてか彼女は、見捨てることなく心配し続けてくれていた。

目があつて、僕は力なく笑うしかなかった。

それにつられるように中村も笑った。その頭の上を、まるい月が浮かんでいた。

中村が自転車に乗って去っていくのを見送ってから、僕はようやく、身体を起こした。

痛みを通り越してじんわりとしびれていた背中が、腰が、すこし動かすたびにしみしときしむ。思いのほか軽症だったけれど、あちこち青あざになるだろうなと思った。頭を打つことも足をくじくこともなくてほんとうによかった。

立ち上がり、僕は身体についた砂埃を払う。髪の間にもしつかり砂が入り込んでしまったようで、どんなにはたいても次から次へと落ちてくる。口の中もすこしじりじりした。

そつと息を吸うと、肺が痛んだ。衝撃はここまできていたらしいけれど呼吸をくりかえすうちに痛みもやわらいでいって、僕はしめった土の香りを胸いっぱい吸い込み気持ちを落ち着けた。

背中泥汚れはそうとうひどいだろう。母親にばれると怒られるに違いない。なるべく今のうちに汚れを落としておこうと、僕は痛みがぶりかえすのを覚悟で背中に手をまわした。

「……………っ？」

砂だらけになる指先に何かが触れて、僕は思わず動きを止めた。まさか。息を吞んで、僕は早まりそうになる心を鎮める。おそろおそろ指でつついたそのかたいものは、実にあっさりと背中からはがれて落ちた。ただの石だった。

落胆は隠せなかった。すこしでも、翼が戻ってきたのではないかと期待した自分が情けなかった。

でも不思議と、背中できすぶり続けた翼の痛みは消えてしまっていた。落ちたショックで、溶け残っていた付け根そのものがぼろりととれてしまったのかもしれない。指で触っただけではよくわからなくて、鏡がない今は確認することができなかった。

家に帰ろう。僕は歩き出しながら、なぜか足取りがいくぶん軽くなっていることに気がついた。

心の中のわだかまりが、すこしやわらいだからだと思った。

これからきつと、もつとたくさん、もやもやを抱えることは増えてくるんだと思う。思い通りに行かなくて、いらだってしまうことももつともつとあるのだと思う。また、一時の感情でかんしゃくを起こして、大事なものを失いそうになることが訪れるのだろう。

けれど僕は、また、こんな思いをしたくはなかった。なくしてしまった翼を、さらに自分から遠ざけるようなことはしたくなかった。白くなくていい。薄汚れていても真っ黒でもかまわない。小さくていいから、いつでも、この背中に翼が戻ってこられるようにしたい。

ひとかけらでもいいから。自由な心は残していたい。

地面の上を歩くつま先が、ほんのすこしでも、風を含みながら歩いているように。

僕は軽くなっている足がどうなっているのかをたしかめたくて、地面についているのか離れているのかを確認したくて、

けれど事実を目にして落胆しなくなって、月を見上げながら歩き続けた。

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0029o/>

---

僕は飛べなくなりました

2010年10月9日10時18分発行